

クプレ『徐カンディダ伝』⁽¹⁾について

矢 澤 利 彦

ベルギー・イエズス会士フィリップ・クプレ (Philippe Couplet 柏応理、一六二四頃—九二二) は在華二十四年間のうち、教状を報告するため、また新たに來華希望の宣教師を募るために、一六八一年マカオを發ち、八二年に帰欧したが、ローマ教皇とポルトガル国王との間に生じた紛議のために、九二年まで中国へ向けて再出發することができなかった。かれは結局この帰航の途中で事故のために生命を落としてしまったが、ヨーロッパに滞在中にラテン語で *Historia nobilis Feminae Candidae Hiu, Christinae Sinensis, quae anno aetatis 70, viduitis 40 decessit anno 1680* (『有名な女性キリスト教信者許カンディダ夫人の物語、かの女は一六八〇年に、四十年間に亙る寡婦生活ののち、七十歳で死んだ』) を著したといふ。Louis Pister⁽²⁾ によれば、かれはラテン語原文を見ていないようであるし、Henri Corder⁽³⁾ も実見してはいないと推察される。また Robert Streit⁽⁴⁾ もラテン語の刊本があったことは記していない。

一方 Carlos Sommervogel はつぎのように述べている。「思うにクプレ神父は本書をラテン語で編著したが、公

クプレ『徐カンディダ伝』について 矢澤

第七十一卷 八七



クプレ『徐カンディダ伝』の扉と巻頭（東洋文庫蔵）

刊するには至らなかった。Orléans神父による翻訳は、クプレの原稿に従って行われたか、それともクプレ神父がこれをフランス語で書き、Orléans神父がそれを訂正したかしたものであろう。⁽⁵⁾

ところで「東洋文庫」には、つぎのような標題のフランス文の図書が二部収蔵されている。

Histoire d'une dame chrétienne de la Chine où par occasion les usages de ces Peuples, l'établissement de la Religion, les manières des Missionnaires, & les Exercices de Piété des nouveaux Chrétiens sont expliqués.

これを訳すとつぎのようになる。「シナの信者である一夫人の話、そのなかでは、折に触れてこの国民の慣習、信仰の（この国における）確立、宣教師たちの態度、新信者たちの信仰心にあふれた勤めぶりなどが説明されている」。この書は一六八八年にパリのEstienne Michallet社

から出版されている。翻訳者はCordierによればPierre Joseph d'Orléansであったという。Sommervogelに見えているように、ラテン文の刊本が存在していないとするならば、これがカンディダの唯一の正伝である。

この仏文から翻訳されたと思われるものに一六九一年のスペイン語版（マドリッド）、一六九四年のフラマン語版（アントワープ）がある。中国語訳の刊行は許采白の『許太夫人伝略』（徐家滙益閣館、一八八二）が最初である。この訳文は文語をもって記されていたが、それを白話文に改めたのが沈錦標の『許太夫人伝略』（上海土山湾印書館、一九二七）である。そのあと原文から新訳され、多数のすぐれた註をつけた徐允希の『一位中国奉教太太許母徐太夫人事略』（上海土山湾印書館、一九三八）が出て⁽⁶⁾いるが、個人所有者のことは別として、どうしたわけか日本の公共図書館でこれらの中国書を所蔵しているところはない。

このたびわたしはこの原書の邦訳と研究を志し、ほぼその業を終えたけれども、出版事情などからそれを公けにするにはなおかなりの日時がかかると思うので、とりあえずこの書を細かく検討して得た意見をいくつかつぎに記してみたい。

A クプレの『カンディダ伝』はつぎの諸点ですぐれた史料である

1 記述がおおむね正確で、誇張や虚構が少い

あとであげるように、ヨーロッパ人であったがために犯したいくつかのやむを得ない誤りはあるけれども、これはまったく瑕疵かしと言っていないもので、われわれがヨーロッパのことを語ろうとすれば、日常茶飯に犯すような

クプレ『徐カンディダ伝』について 矢澤

第七十一巻 八九

程度のものにすぎない。誇張といえ、カンディダをヨーロッパの女性カトリックの信者の手本としても恥かしくない信仰堅固で慈悲心にあふれた人物だと描きたいという気持ちがあまりにも強すぎるために、イタリアの所領の全部をカトリック教会に寄付したことで聖女とたたえられているマティルデ女王⁽⁷⁾とカンディダとを比較してみたり、夫を改宗させたということから、フランク王クロウヴィスを入信させた聖女クロティルド⁽⁸⁾をひき合いに出したり、カンディダが夫パトリキウスを信仰に帰依させた聖女モニカ⁽⁹⁾と同じ働きをその夫（許速度）の魂の上に及ぼしたと記したりしているのがそのようにも感ぜられるけれども、ことを詳しく検討してみると、いずれも事実を述べたものにすぎず、決して度外れた誇張とは言えない。要するに読者に異国の女性信者の堅信を語るに当たって、親近観をもたせようとして教会史上の有名な聖女の名を使っただけのことなのである。教会には列聖とか列福とかいう制度⁽¹⁰⁾があるから、クプレが、自分が聴罪司祭の役を勤めたカンディダがその教会に対して果たした功績を認められて、少なくとも列福の対象となることを期待することがなかったとは言えないけれども、このような傾向は教会関係の記録を残したすべての筆者に共通することであるから、とくに咎めだてすべきことではない。しかも列福や列聖に際しては、あらゆる資料をつき合わせて慎重に検討が行われるから、事実から遠く逸脱したような大きな誇張や虚構があれば、たちまちに化けの皮が剥がされてしまう。それだから筆者たちはそれほどフィクションを混じえないのが普通である。クプレもこの辺を十分に心得ていてむしろ地味にカンディダの事績を述べることに終始している。この書が細川ガラシアの伝記ほど読んで面白くないのは一つはそのためである。

2 中国における女性の社会からの隔離、このことが女性の入信をひじょうに困難にしたこと、またこの困難を克服するために宣教師やカンディダがどのように苦勞したかがきわめて明快に語られている。

クブレは中国の娘ならびに妻は世間とはほとんど交渉がないので、かの女たちの姿を戸外では見ることがなく、かの女たちがその生涯の大部分を過ごす籠居にまざる厳格さはまず見当たらないほど奥まった建物のなかにひきこもって暮らしていることを指摘している。しかしかの女たちは偶像教の寺院を訪問することは許されており、偶像教の僧侶と話をする自由はもっている。だから宣教師たちが、リッチら初期のイエズス会士が一時そうしていたように、仏教僧侶風の衣服をずっと着続けていたならば、かれらはより容易に中国の女性に近づけたであろうけれども、中国の読書人（ことに徐光啓）の勸告をいれて、読書人の着る衣服に変えたので、直接女性に接触する機会が失われてしまった。宣教師たちはそのために、まず夫たちを通じてその妻や娘を信仰に引き入れる方法と、信仰書を家庭内に配ることによって女性を読書によって宗教に導く間接の布教法を取るよりほかはなかった。このあとの方はカンディダ自身が強く認識していたことのものであつて、かの女は教会堂に赴く自由を有していない女性たちを改宗するためのもっとも確実な方法だとして、宣教師たちに、宗教書ばかりでなく、あらゆる種類の西洋の学問を漢訳して刊行することを勧め、それを中国の全教会堂に分配したほか、自分と関わりのあるすべての女性に寄贈したという。クブレはこれらの書物のことを「内なる宣教師」と呼んでいる。この効果が期待できるとすれば、女性にある程度の教養があり、文字が読めることが必要であつた。カンディダ自身およびその

周辺の人びとのなかには、女性でありながら読書できるものが比較的多く存在していたと思われるけれども、一般的には文盲の女性が多かったに違いないから、この「内なる宣教師」は果たしてカンディダの期待通りの成果をあげたかどうかは疑問である。

女性の隔離は当然のことながら男女が一堂に会することを不可能にした。そのためイエズス会士は上海の大教会堂とはべつに松江に女子用の聖母教会堂をもっており、この後者の建築資金はカンディダが支出したものであり、女性信者たちは年五回この教会堂に集合したという。カンディダはこの女性専用の教会堂の礼拝に一番熱心に出席した。しかしミサ聖祭を主宰するのは男性である司祭なのであるから、当然司祭が聖堂内に入らなければならなかったはずである。かれらが聖母教会堂にどのようにして入ったかについてはカンディダの聴罪司祭であったクブレは沈黙を守っている。祭壇の儀式が終って司祭が戸口から外に出るまえに、カンディダをリーダーとする全女性信者はこの戸口の方へ赴き、顔を祭壇に向けて一列に並び、中国風の三敬礼を始める。司祭はかの女たちの左側に立って、やはり祭壇に顔を向けて、答礼を行い、そのあと婦人たちがお辞儀をするたびに、同じ姿勢で何度も感謝のお辞儀を繰り返した。要するに女子用教会堂にあっては、信者と司祭とが真つ正面から顔を合わせることを極力避ける措置が取られたのである。これも男女が同席して宗教行事を催しているという非難をかわすためであった。なお説教を行う場合にも司祭はずつと祭壇の方を向き、信者の顔を見ることがなかった。カトリック教会には悔悛の秘蹟という重要な秘蹟があり、信者は受洗後犯した罪を司教あるいは司祭に告白(告解)して罪の赦しを願わなくてはならない。普通、教会堂には信者と司祭とが一对一で顔を合わせ、信者が罪を告

白する場処がいくつか設けられている。ヨーロッパではこの行事はべつに中傷の対象とはならないが、中国ではこれはとんでもないことであつた。男女が一堂に二人だけにいるということだけで非難の対象になるばかりでなく、中国の女性は夫や父以外の男性と顔を合わせることがないので、異性の前に出ると羞恥心に圧倒されて、一言もしゃべれなくなつてしまい、肝心の罪の告白ができなくなつてしまうのである。そこでイエズス会士は告白する信者と聴罪者との間に大きなカーテンを引き、互いに相手の顔を見ないでこの儀式をやるよう配慮した。カンディダの場合には、女性信者が異性である司祭にものおじしようにさせるために、幼女の時代から司祭たちの足元に置いて慣れさせるといふ措置を取つたという。

カトリック教会が信者に対して行ふ儀式に塗油ということがある。少なくとも十七世紀には洗札に際して男女の受洗者の耳を濡らしたり、口に塩をつけたり、胸と頭に油（オリブ油であらう）を塗つたことは確かである。しかし女性隔離の強い慣習のあつた中国にあつて、女性受洗者に対してこの行事を實行しようとすれば、手ひどい反撃を受けることは確かであつた。そこでイエズス会はこの秘蹟が救霊にとつて必須のものではないという理由から、女性には省略し、これは男性用のものであると説明していた。⁽¹²⁾これについてクブレは受洗する婦人たちの胸に塗油することを、終油の秘蹟を受ける婦人の足に塗油することともに省略している旨を明言し、父でも夫でもない男性が女性の膚に直接手を触れることに対して微妙な感情を中国人がもっている限りは、それを省いても差し支えないこの種の儀式を、中国人に承認させるのには、そんなに長く待つ必要はないとしている。信者に施すべき儀礼の一部を女性に限つて省略してすませることにについては、イエズス会士もさすがに多少氣が咎め

ていたらしく、それをかれらが自ら記した記事は必ずしも多くは残っていないので、クプレのこの伝えは貴重である。

ところでカンディダは臨終に当たって、目、耳、鼻、口といった開口部と、手に塗油を受けた。しかし教会の定めている足への塗油は受けなかった。これは中国ではどんなにわずかでも女性が足を露わにすることは破廉恥行為だとされていたので、宣教師はここに塗油することは行わないことにしていたからであるという。

3 宣教師たちの保護者としてのカンディダのことをよく伝えている

クプレは明末の大学士徐光啓が西洋宣教師の強力なパトロンであったことを記したあと、かれの孫娘であるカンディダがその行動を継いで遠来の客を厚く遇したことを力をこめて書いている。クプレによれば、カンディダは自分を自分が生んだ子供たちだけの母とは考えず、貧者たちの母親であり、とくに貧しい福音伝道者たちの母親であろうとしたという。かの女の三人の兄弟はそれぞれ父徐驥の遺産を相続したけれども、間もなく浪費によってそれを次第に失ってしまった。かれらはクプレにすがって、この神父の口ききでカンディダから援助を得ようとした。カンディダは最小限に必要な額をしか融通しなかった。これについて兄弟たちにカンディダがけちであるという不満があることを知ったとき、かの女は「わたしの父、わたしの兄弟、わたしの近親は、地の果てからイエス・キリストを宣伝するため、われわれをその子供たちにするためにやって来た宣教師たちではないか」と言い、「わたしがわたしの労働の収益とわたしの貯蓄をすすんで差しあげるのはこの人たちである」と語ったと

いう。かの女は努めて宣教師たちの母であり、きょうだいであろうとしたのである。

かの女は宣教師たちが困窮のどん底にあり、食べるものさえもないということを知ったとき、ひどく心を痛め、十字架の前に跪き、各宣教師にそれぞれ二百両の金額を与えることを決めた。宣教師の数は全国で二十五名に上っていたから、全体で五千両⁽¹³⁾、すなわちフランスの金で二万二千リーヴルに達する銀をクプレを通じてすべての宣教師に分配させた。楊光先の迫害によって宣教師たちが都に呼ばれたとき、かの女は自分の兄弟の一人に銀をもたせて派遣し、宣教師たちを途中で迎えて慰労を行わせた。宣教師たちを護送している役人たちがいつもの手で被告人を虐待するのを銀の力で阻止させた。また宣教師たちが広州に軟禁されると、自分の使用人を広州へ派遣し、宣教師たちの六年に亘った抑留生活を維持するために必要な一万二千リーヴルを支給させたという。

一六五七年、八名のフランス・イエズス会士が来朝したが、そのうちの一人ジャック・ル・ファールは盗賊につかまり、着物を剥がれ、傷を受け、半死の状態で見棄てられた。カンディダはかれを家に引きとり、傷の手当をさせた。宣教師の頭はひどくなぐられており、八つの骨片を取り出さなくてはならなかったが、かの女の厚い介抱によって三か月たつと元気になった。その後かの女はこの宣教師が行うあらゆる企図を積極的に援助した。

4 信心会 (Congrégation) の母としてのカンディダの姿がいきいきと表現されている。

信者たちの信仰を一層深めさせるためには、目的を同じくする者を選んだり、年齢・身分・信仰経験・身分・

性別など同じステータスのものを集めたりして団体をつくらせ、競争原理をも加味して切磋琢磨させることが必要である。こういう団体のことをcongrégation⁽¹⁾と言ひ、信心会とか講とか訳される。この信心会の運営のやりかたについてはLettre édifiantes et curieusesに納められた書簡中にも詳しい記事が残っていて、宣教師たちがいかにかこの点に心をくだいたかを知ることができるが、クプレはカンディダを江南地区の信心会の母のようなものであるとし、つぎに掲げるような諸信心会の維持に協力し、ある会にはイエスの苦難像や絵を寄贈し、またある会には自分の費用もちで刻刊させた書物を与えた。伝道士たちの信心会には毎年数珠、アグヌス・デイ（イエスを指す小羊と教皇名とを載せた蠟像）・聖像・十字架・メダルその他類似のものを与えて、かれらが教えこんだ子供たちに分配させた。九月二十九日の聖ミカエルの祝日は上海の大教会堂で、子供たちのうちで優秀な信仰実績をあげた者に、これらの品々が賞品として授与されたという。カンディダは正式には聖処女を祀る女性だけの信心会である「聖母会」にしか参加できなかったが、イエスの苦難をしのんで金曜日に熱烈な信者が血の流れる鞭打ちを体験する「耶蘇苦会」にならって、聖体拝領をする前日には絶食し、鞭打ちの苦行を自宅において行つた。あまり激しくそれを行うので、宣教師がかの女の健康を心配してやめさせなければならぬほどであつた。

生員と読書人とからなる「聖依納爵会」はイグナシオ・ロヨラをパトロンとする会で、毎日ついたちに集合し、宗教の基本的問題について一人が演説する。宣教師がこれをいいできだと考えたときには、宣教師がつぎの日曜日に教会堂でこれを説教に使ってくれる。中国人は自分の書いたものを朗読する傾向が強いので、この行動はかれらの精神を形成し、それを啓発するのにおおいに効果があつたという。かれらには宗教書だけでなく、中国語

に訳された哲学書・倫理学書・数学書も与えられたので、それはおおいに信者たちの作文能力を高め、科挙の受験に成功することにはしばしば役立った。この種の書の出版にカンデイダが与えた経済援助がきわめて有効であったことはいうまでもない。

伝道士（カテキスト、日本キリシタン史の同宿^{どうじゆく}）の信心会は「聖方濟各会」である。この方濟各はフランシスコ・ザビエルを指し、この聖人の保護のもとに、六十人の伝道士が自分の担当区域の教会堂で、子供たちに公教要理と祈禱を教えるこむ練習を積む会である。かれらは年に四度信者の家を訪ねて、各家族の信仰状態や、教会の救済を必要としている老人か病人がいなかどうかを調べて宣教師にその結果を報告した。かれらはその際信仰心の厚い子供には証明書を与える。その証明書にもとづいて、さきにあげた九月二十九日における聖ミカエルの祝日の上海大聖堂における集合で、カンデイダが寄贈した賞品が授けられるのである。このほかに「天神会」と呼ばれる子供たちの信心会もあったという。

5 慈善家としてのカンデイダが十分に描かれている

貧しい者に慈善を施すということはキリスト教社会ではごく普通のことである。しかし、中国では親に仕え、親をいたわり、その面倒を見ることは五常の第一だとされていて、自分の父母や祖父母を大切にすることは十分に教えたけれども、自分とはあかの他人である身よりのない老人や貧者を個人的に救恤するというようなことは割に省みられなかったのではあるまいか。困窮している寡婦や老人や棄児を救うのは国の仕事、公の義務であつ

て、個人の関わるべきことではないという気持ちが強かったから、恤老・恤孤・恤貧・恤廢（寡婦）といった社会政策にもとづく公的、あるいは半公的な施設、すなわち育嬰堂とか救済院といったものが生まれたといっている。あるいは皇帝が仁慈を施す余地を残すためにかれに取っておかれたとも考えられる。そのためもあると思われるが、中国のカトリック教徒が教会堂を建てるために寄付をしたという記録はたまに見ることがあるけれども、自分の財布を開いて貧者、困窮者、ことに縁もゆかりもない者を救ったという例はほとんど見ることができない。あとでカンディダの行動のきわめてユニークな点をいくつかあげるつもりであり、その場所で説いてもよかったけれども、ここにあげることにしたカンディダの慈善行為は中国カトリック史上ではとりわけ目立っている。いまそのいくつかをあげてみよう。

カンディダが慈悲心にあふれた行為をするということはよく知られていたもので、かの女に救済を求めてやって来る者たちが跡を断たなかった。これがかの女の家族の者に迷惑をかけてはいけないというので、かの女は自分の住む家の裏に一門を開け、家族の者をわずらわさないで、じかにかの女のもとにやって来れるような措置を取った。ところがかれの息子で幼いときに信者になっていながら、のちに妾をもったりしてその信仰にいま一つの観があつた進士のバジリーオ許纘⁽¹⁵⁾曾は、邪魔者が絶えず入って来ることによって母の健康が損われることを心配し、かの女のためにべつの住居を建ててここに移らせ、かの女がこれまで施与を分配し、貧者の困窮を救うために利用していたこの門をふさいでしまった。しかしかの女は貧しい隣人を救うということにかけては創意工夫に富んでいたので、息子に知られないようなべつの方法で慈悲の行動を続けた。

明清時代に來朝したヨーロッパ人がこの国の社會慣習のうちでとくに賞讃しているのは育嬰堂、すなわち孤兒收容所の存在であつて、それについては詳しい記述が残されている。ヨーロッパではこの種のもものは教會の經營であつたのに対して、中國では宗教界とはまったく無關係に、すなわち慈善ではなくして、社會福祉として公的、もしくは半ば公的に運営されていることがこれらの関心をひいたのである。カンディダは貧民がよく棄児をすること、ことに女兒を棄てることが多いことに気がついて、高級官僚であつた息子のてづるで蘇州に駐在している巡撫から許可を得て、育嬰堂として使用するための大きな家屋の購入に無事成功した。巡撫はこの善事を助けるために他の官員とともに自らなにかの寄付を行った。カンディダは宣教師を助けるための費用については高級官僚である息子に贊助を乞うようなことはなかつたが、この育嬰堂の設立は私事ではないという考えからであらう、かなりの額を出してもらつたという。ここに收容される子供たちの数があまりにも多かつたので、どんなに氣を配つても毎年二百名以上のものが死んだ。かの女はこれらの子供たちのために小さな棺と屍衣を用意し、自分がかれらのために購入しておいた墓地に埋葬した。もちろんかの女がこの善行をするためにねらつたのは貧しさのために棄てられ、死んで行くものに洗禮を施して救霊するという動機も含まれていたのである。

カトリック教會による福祉活動（孤兒院・病院・學校の經營）が、たとえ非信者にも広く公開されているものであらうと、窮極的には信者の増加を図り、教勢の拡大を目的とするものであることは言をまたないから、カンディダの慈善行為に同じ動機があつたとしても非難するに当たらない。かの女は盲人を何人か養つていたが、それは信用の置けない占卜で人をだまして生計をたてているかれらを教育して信仰の眞實を學ばせ、外に出て占いの代

わりに宗教の玄義を人びとに宣伝させようとしたものであった。そして貧者に対しては、信者であろうと、非信者であろうと、かれらを埋葬してやること、棺を用意してやることに力を尽し、また非信者に施与を行う際には交換条件としてロザリオの祈りを何回か誦してくれるよう求めた。クブレは中国人の最大の関心事は墓を確保し、⁽¹⁷⁾棺を準備すること（カンディダは生前に息子から贈られた八百両もする棺を所有していた）にあり、かれらは生きているうちにこれをまだ手に入れていないと自分を不幸だと考えることを指摘した上で、カンディダがこの費用を支出する金をもたない非信者に入信する気持ちを抱かせるために、埋めてもらう土地がなく、入る棺の用意のない者にその面倒を見ることを申し出たと述べている。要するにカンディダは宗教を拡げることに関心することならば、なんでも利用したのである。

6 その他の注目すべき点

他の宣教師の著述にはあまり見えていなくて、しかも史料として役に立つ諸点をいくつかあげておこう。

平西王呉三桂とカンディダの息子である許纘曾との関係が記されていること。許は一六七〇年雲南按察使に任ぜられたが、この間に呉三桂と知り合った。そして呉に叛乱の意図のあることを知って危険を感じたので、年老いた母の面倒を見るという口実で職を辞して一年もたたないうちに、郷里に戻った。ところがかれは不用意にも雲南在任中の好遇を感謝する手紙に贈物をつけて呉に送った。叛意を表明した呉はこれを喜び、自分がそのうちに松江を訪問するという意志を伝えた。ところがこの返書が途中で官の押収するところとなったので大騒ぎとな

ってしまった。許に好意をもっていた南京の総督と蘇州の巡撫が朝廷に対して申し開きをしてくれたので、許はやっと助かった。

宣教師やカンディダが日本あるいは日本の禁教に対して強い関心をもっていたことが知れること。例えば揚子江の河口にある崇明島を日本と中国との間にある島と言ってみたり、宣教師たちの間に、かれらが日本の禁教のときと同じように、中国から全部追放される危機に遭遇する場合に備えて、かれらに代って宗教を守ることできる中国人司祭を養成しておくという意図があったこと、カンディダが長期間に互る迫害にもめげず、信仰を固く維持した何人かの日本人女性の手本に感激して、自分が神への奉仕に臆病であることについて自分自身を責めたということなどである。

カンディダが息子の信仰心の低減を心配してしばしば思いきった措置を取ったことが報告されていること。一例として息子が『勸戒図説』という仏教書から引用した物語と、占星術から出た迷信的な内容を盛った書物を著作したとき、母権を行使して、すでにできあがっていた書物を板木とともに取りあげ、それを宣教師にあずけて焼いてくれるよう頼んだことがあげられる。按察使という高位に昇った息子も母の頼みには抗することができなかったのである。

B クプレの記述に見られる明らかな間違い

1 カンディダの履歴についての叙述が不正確である

クプレ『徐カンディダ伝』について 矢澤

これは徐允希・方豪両氏が家譜や許纘曾の自伝である『鶴沙自序』などを研究した結果分かったことである。

カンディダが一六〇七年に生まれ、一六八〇年十月二十四日に七十三歳で死んだことについてのクプレの記録は正しいのであるが、かの女が三十歳で夫の許遠度と死別し、四十三年間に互って寡婦の生活を送ったとしているのは誤りで、正確には四十六歳で夫を失い、二十七年間に互って未亡人の暮らしをしたと改める必要があるようである。⁽¹⁸⁾三十という数字はどうもかの女が夫とともに暮らした期間であつたらしく、そのことをかの女が夫を失った歳とクプレが誤解したものと見える。カンディダが十六歳で松江の許遠度のもとに嫁したことは明らかであるからである。

つぎにかの女の父徐驥は四人の息子と四人の娘をもち、カンディダは四人の娘のなかでは末娘であるとクプレは述べているけれども、徐允希によれば正しくは驥には五男四女があり、カンディダは次女とすべきであるという。⁽¹⁹⁾クプレがなぜこのような誤りをしたのかよく分からないが、この伝記はかれのヨーロッパ滞在中に刊行されたので、確かめる相手にも恵まれないままに、うろ覚えのまま記さなければならなかったからである⁽²⁰⁾と見たい。

2 カンディダの父徐驥が三級の官吏であるとしているが、これは七級の誤りである。級は品⁽²⁰⁾(位)のことに違いない。徐驥は父廕(父の功による特別任用)で中書舎人の職を得たが、この中書舎人の官位は七品であるからである。明の中書舎人の仕事は皇帝の詔勅を清書する役で、中書科に属した。クプレはこの人がずっとこの職にあつたかのような書き方をしているけれども、早く辞職して郷里に戻っていたらしい。なおかれが郷賢祠に祀られ

たことは事実のようであるが、クプレには郷賢祠というものの実体が十分に把握されていなかったらしく、文面からではこの祠の具体的な姿を思い浮かべることはむずかしい。

3 カンディダの息子の許纘曾が江西・湖広両省の郵便および航行の総監督の役を勤めたと記されているけれども、かれが実際に任ぜられたのは江西駅伝道副便であって、この任務には湖広のことは含まれていない。クプレの思い違いであろう。⁽²¹⁾

4 クプレは徐光啓がある新信者の役人を欽天監監正に引きあげたと述べている。この新信者というのは山東布政使司右参政李天経を指すのであるが、かれは曆法改革の仕事を行うために明末に設けられた曆局の監督者として徐光啓から推薦された人であって、在来の欽天監の監正になったわけではない。かれは自分のことを一六三五年には「督修曆法山東布政使司右参政」(『増訂徐文定公集』巻四、治曆疏稿、六一頁)と名乗り、三九年には、督修曆法、加光祿寺卿」(『増訂徐文定公集』巻四、治曆疏稿、六三頁)と称している。このあたりのニュアンスが微妙なので、外国人であるクプレが監正と誤ったとしても不思議ではない。

5 これは小さいことであるが、清初の曆獄の原動力であった楊光先が結局有罪だと宣告されて配所に送られる途中悪性の潰瘍にかかって死んだとクプレは述べているけれども、実際には議政王たちが「楊をただちに斬罪

に処し、妻子を寧古塔に送るべし」という議決を出したのに対して、皇帝は「楊は死刑に処すべきであるが、老年であるから処刑を免除する。かれの妻子も徒刑を免かれさせる」という決定を下しているのであるから、帰郷の途中で死んだとすべきである。楊は背に出た病気で山東省で死んだというから、死因についてのクプレの伝えは正しいといっている。⁽²²⁾

6 クプレは皇帝がカンディダに対して「有徳な夫人」を意味する淑人という称号を贈ったと記して、カンディダがこの封を受けたのはあたかもかの女の有徳な行動を認められてのことであつたかのように記しているが、これはそうではなくて、かの女の息子が三品官である按察使に任ぜられた功に報いるための封贈であつたのである。清代には「婦人因子封贈」(『清史稿』選舉志五)という制度があつて、父母は子の官位に従つて封を受けることになつていた。正従三品の妻が受ける封が淑人であつたので、母親の場合も淑人の封が贈られたと見るべきである。

以上クプレの書に見えるいくつかの誤りを指摘したが、はじめに述べたようにいずれも小さな問題にすぎず、その史料としての価値を損じるほどのものではない。

C 間違いとは言えないかも知れないけれども疑問のある点

1 孔子を記念するために迷信的な犠牲を捧げる読書人があつたと、宣教師たちはいつもこの誤りを弾劾し、偶

像教を思わせる一切のものと、あらゆる迷信とかいったものを放棄する者にしか洗礼を授けなかったとクプレが言っているのは真実を語っているとは思えない。孔子を祭る儀礼は清代には二月、八月の上旬の丁ひのちの日に地方長官が主祭となつて行い、下僚や生員が助祭の役を勤めた。その際羊と豕（おおぶた）が犠牲として献げられた。クプレのいう読書人というのがどの程度の位置の者を指すのか分明を欠くけれども、生員以上の者はまずこの儀式に参列することを義務づけられていたといつていいし、知県以上の者は自らこの儀式を主宰しなければならなかった。官吏とか読書人に信者層を広げることを一つの重要な目的としていたイエズス会はこの点をよく認識していたからこそ、実施面での迷信的要素に眼をつぶり、理論面での無垢さを主張して、孔子崇拜儀礼への信者の参加を認めていたというのが真相であると思われる。クプレが言うようなことが本当であれば、典礼問題など起りはしなかったはずである。

2 やはり犠牲に関することであるが、皇子たちや巡撫たちの誕生日の大祭に殺される動物を犠牲とは考えるべきではなく、治めるものと治められるものとともに食べて一体感を味わう対象にすぎないとクプレは述べているけれども、中国人が祝いや祭りを催す際に、必ず犠牲を献げる慣習があることを考えれば、かれの意見はやや牽強附会の感じがする。クプレはこの書物が婦人たちをはじめとする多くの非イエズス会士・反イエズス会士に読まれることを予想して、言葉を飾ったのではあるまいか。⁽²³⁾

D カンディタの行動に見られるとくに注目すべき点

1 蓄財

かの女が宣教師への経済的援助・信心会の維持・貧者の救恤を積極的に行ったことはAの(3)(4)(5)で述べた。これらは中国の女性信者の行為としてはすでに特筆すべきことであるが、このどれも費用のおおいかかる事業を実行した財源はどこにあったのであろうか。かの女は徐光啓の孫であるとはいえ、五人の兄弟と、自分を入れて四人の姉妹があり、十六歳で許家に嫁ぐに際して、士人の娘としての嫁入仕度は相応にもらったことではあろうけれども、財産のようなものは与えられなかったはずである。クブレによれば、かの女は徐光啓が宣教師たちからもらった西洋の珍奇な品の一部を相続していたようであるが、まずその程度のものであったろう。その上かの女自身には八人の子供があつたし、許家は松江の名家ではあつたものの、夫の遠度は五人兄弟のうちの四男である上に、官途にもつかなかつた人であつたのであるから、もともと経済的に豊かであつたとは思えない。息子の續曾はたしかに按察使という高位にまで登つた人ではあるけれども、カンディタは中国役人の手もとに入つて来る金の出どころについて不信の念を抱いていたようで、その金を宣教師の救護や、信仰事業に廻すことを喜ばなかつたというから、息子からこういつた費用を出してもらつたとはまず考えられない。それではどこから捻出したのか。

クブレはカンディタが身分からそうせざるを得なかつた閉居と、かの女のあらゆる種類の刺繍や絹織物工芸へ

の腕前を利用して、自分の姉妹、娘、婢たちとともに大変な勤勉さで働き、かなりの蓄財をした上で、これを自家の使用人であった二人の男にあずけて商売をやらせ、資金の増大を図ったところ、それがうまく行つて多額の蓄財ができたと述べている。わたしはかねがね十九世紀の末までの中国の女性が社会から隔離され、労働力を奪われ、まったく男性に寄生していたという説には、中国人の勤勉な性格から考えて全面的には賛成できないでいたが、このクプレの記事を読んで長年の疑問が解けた思いがした。十九世紀末までの中国女性は纏足をおしつけられ、「内」と呼ばれる家の奥に隔離され、外部との直接の交渉を遮断されてはいたけれども、決して無為に日を過ごしていたわけではなく、現金収入を得ることのできる屋内での手仕事に精を出し、その成果を夫や兄弟や使用人を通じて外部に売り出し、家計を助けるばかりでなく、今日の財テクに類することさえもやっていたと考えた方が自然ではあるまいか。カンディダはこの点ではユニークだとは言えず、むしろほとんどすべての女性と同じことをやったのだとわたしは考える。もっともこういうことをやるのには綿花・木綿・繭・米・雑穀の集散地である松江は絶好の条件に恵まれていたということは否定できない。なぜわたしがほかの女性もカンディダと同じことをやっていたと考えるかというと、クプレが、かの女はもっとも著名な夫人たちに共通する習慣に従つて家内労働にいそしんだと述べているからである。

2 息子の赴任地への同行

中国の高級官僚の母親は息子の赴任地へ同行するようなことはほとんどなく、郷里に残留しているのが普通で

あった。ところがカンディダは新しい土地に教会を建て、宗教を伝えたいという希望が強かったので、息子が転職することに同行したり、同行しようとした⁽²⁴⁾。

3 修国器⁽²⁵⁾の夫人との文通

中国の女性には社会から隔離されていることもあって、自分の親戚または姻戚の女性としか訪問を交わさないのが普通であるが、カンディダはクプレから南京にいくかつての巡撫修国器とその妻のアガタがきわめて熱心な信者であることを知って、クプレを通じて修夫妻に手紙と贈物を送った。アガタもこれに答えたので中国では珍しい女性の通信による仲間が成立した。

4 自宅における芝居の上演に出席拒否

中国ではなにかの祝いごとに演技者たちを自宅に呼び、芝居を上演させて宴会の余興とするのが普通であった。こういう場合には高いところに、周りを覆った婦人用の棧敷を設けて、かの女たちから舞台は見えるけれども、出席しているものからはかの女たちの姿は見えないようにした。普通の女性の外に出る道が閉ざれているので、この家庭における芝居見物にました楽しみはないことから大喜びで参加するのであるが、カンディダは息子がかの女の誕生日を祝って催してくれた芝居を見ることを拒否した。迷信的なものが少しでも入っていることを恐れたものであろう。

5 聖地巡礼あるいはヨーロッパ行き願望

このことをカンディダはひたすら願望したが、当然のことながら果たせなかった。

註

- (1) 夫人というときには、許カンディダ夫人、あるいは許徐カンディダ夫人とした方がいいと思うが、わたしはかの女が徐光啓の孫であることを重視して「徐カンディダ伝」とした。カンディダという名は聖ペトロが洗礼を施した最初の女性信者、聖女カンディダ（一世紀の人）の名を取ったものであろう。なおカンディダはイタリア語で、「純白な」「無垢の」という形容詞の女性形である。
 - (2) *Notices biographiques et bibliographiques sur les Jésuites de l'ancienne mission de Chine*. 1552-1773. Tome I. P. 310.
 - (3) *Bibliotheca Sinica*. Tome II. p. 832.
 - (4) *Bibliotheca Missionum*. V Band pp. 901, 915, 930.
 - (5) *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*. Tome II. p. 1563.
 - (6) 方豪『中国天主教史人物伝』第二冊、六七頁。なお徐允希訳は一九六五年に台中光啓編訳館から重印されて
- いるけれども、これも入手できない。
- (7) マティルデ（一〇四六—一一一五）はカノッサ城主ボニファチオ三世の娘。叙任権闘争で教皇を支持したことで有名。かの女は聖ペトロの遺産の一部を含むその全領地を教会に寄附した。聖女。
 - (8) クロティルド（四七五頃—五四五）はブルゴーニュ王の娘で、フランク王クロウヴィス一世に嫁いだ。信仰心が強く夫をキリスト教に改宗させた。聖女。
 - (9) モニカ（三三一—三八七）は聖アウグスティヌスの母で、キリスト教的母性の模範とされる。ローマ帝国の役人である異教徒パトリキウスに嫁し、放縦な夫を改宗させた。聖女。
 - (10) 日本人のなかには長崎西坂で殉教した二十六聖人のなかに含まれる多くの聖人がいるけれども、中国では殉教者がいなかったわけではないもの、まだ聖人は出ていない。一七四六年に福建省で殉教した代牧サンスら五人の宣教師も福者にはなったが、聖人にはなっていない。

聖人になる可能性もあるということからであらう、この事件に関連した莫大な量にのぼる漢文資料が宣教師たちによって集められ、現在パリ外国宣教会文書館に所蔵されている。なお福者に列せられた中国人信者はかなり多い（一六四六—一八六二年に殉教したもので列福されたもの二十一名）。

(11) 女子専用教会が設けられたのは松江だけではなく、余裕がある限り宣教師はこれを設けたようである。イエズス会だけでなく、福建省のドミニコ会士も女子用教会堂をもっていたという。一九世紀の後半華北やモンゴル地区にあつては「L」字型の教会堂をつくることが流行した。男女はそれぞれたてよこに設けられた男棟・女棟のべつの入口から入場して着座し、両棟がクロスしたところに祭壇が置かれ、そこで司祭がミサを行った。男女の信者は互いに他性の信者の姿を見ることができなかった。中国側資料としては『清代外交史料』嘉慶十年四月二十日の刑部の上奏に、『嘉慶七年の間において、海甸楊家井地方にもと西洋人の寓所一所があつたのを、改めて聖母堂とし、男女両堂に分かつた。男堂会長六人（中略）、女堂会長楊氏が各々経を講じ、教えを伝えている。毎日男女が来堂して経を念じ、煽惑されるものが多い」とあるのが注目される。なおこの会長は中国天主教史では長

老のことである。

(12) イエズス会士はこの省略について教皇の認可を受けていると主張した。Otto Maas: *Wiederoöffnung der Franziskanermision in der Neuzeit. Münster in Westfalen. 1926, p. 126-7.*

(13) これは一中国婦人が教会に寄付した金額としては驚くべき多額である。ちなみに一七〇六年ころ、康熙は北京の南堂（宣武門前にあつた）の再建費として一万両を下賜した。なお一八世紀にローマの布教聖省は中国で働く宣教師に年額百兩を支給していた。両は円よりもいくらか高かつたようであるから、宣教師がこれによってどんなに助かつたかが想像される。

(14) 例えばパリ—新版 Tome XXIV, p. 236—46.

(15) 康熙初年に発生したいわゆる楊光先の迫害に際して、かれは自分がキリスト教徒だとして糾弾されるや、自分は幼いときに受洗し、何年か信者として過ごしたが、長じてからは信仰をなおざりにしたと釈明した。かれはまた母の死亡後のことかも知れないが、信者でありながら妾をもつていたらしいし、非キリスト教的な著述を行ったという。グレロン著・矢澤利彦訳『東西曆法の対立』一九八六、平河出版社、一五六頁。

(16) 例えば矢澤訳『イエズス会士中国書簡集』4、社会

篇所収の一七二〇年十月十九日づけのダントルコルの書簡、六三―七一頁を見よ。

(17) 中国人で一番高価な棺を買うのは宦官であったが、それでも千両というところであった。宦官が棺を買う話については、ブーヴェ著・後藤末雄訳『康熙帝伝』一九七〇、平凡社、につけた矢澤の解説を参照。

(18) クブレはカンディダが十六歳で許速度のもとに嫁ぎ、結婚生活十四年、三十歳のときに寡婦になったとしているが、徐家の出身である徐允希が調べたところによると、結婚生活三十年、四十六歳のときに未亡人となったとするのが正しいそうである。「一位中国奉教太太許母徐太夫人事略」、上海土山湾印書館、一九三八、八・一三頁。徐允希はなによつてこのような訂正を行ったかを明らかにしてはいないけれども、カンディダが夫との間に三人の男子と五人の女子、すなわち計八人をもったということから考えて、結婚生活が十四年というのはあまりにも短く、この点からも徐允希の説を正しいとすべきである。

(19) カンディダの父の驥には、クブレによれば四人の息子と四人の娘があり、カンディダは末娘であるということであるが、徐允希は驥は五男四女をもち、カンディダは次女とすべきであるとしており、方豪もこれを支持し

クブレ『徐カンディダ伝』について 矢澤

ている。徐允希は上海・松江地区で語られている所伝に従つてこのような訂正を行ったものであろう。浪費のために遺産を使い果たし、合力を頼んで来た兄弟たちをつき放したカンディダの態度から見ても、かれが末娘であったとは思えない。方豪『中国天主教史人物伝』第二冊、六五頁。なお方豪によれば、カンディダの兄弟は上から爾寛、爾爵、爾斗、爾黙、爾路といった。姉妹は長がフエリシタで、同じ市（上海）の艾廷槐に嫁した。つぎがカンディダで松江の許速度に嫁し、そのつぎが同じ市の瞿葉に嫁し、最後がマルティーナで同じ市の潘堯納に嫁したという。姉妹たちのうちでクブレの記事に出て来るのはマルティーナだけで、かの女も早くから寡婦となり、カンディダに劣らずかく信仰を守ったという。カンディダが蓄財をするために自分の姉妹、娘、召し使いたちとともにたいへんな勤勉さで働いたというクブレの記事に見える姉妹というのはこのマルティーナを指すと思われるので、その点からもカンディダ末女説は誤りであると思われる。

(20) ジャコモ徐驥が中書舍人であったことは方豪氏らの研究によつて明らかであるが、クブレはこれを三級の官としている。中書科舍人は七品官であるから、これを三級の官とするのは明らかに誤りである。徐允希もこの

ことを指摘している。なお『明史』卷十四、職官志三によれば、永樂帝は中書科の役所を午門外に置き、中書舎人二十人を定設したが、恩廕によつて俸給を受けるものは定数外であつたという。徐驥は恩廕によつたと思われるので、この扱いを受けたはずである。

(21) 駅伝道は清代につくられた道台であつて、江西駅伝道は当然江西省の駅伝を監督した。許が南昌に駐したことはクブレも述べている。この宣教師は、許が重大な任務を帯びていたことを記したいがために、やや誇張した表現をしてしまったと見たい。

(22) 黃伯禄『正教奉褒』上巻に「奉旨、楊光先本當依議処死、但念其年已老、姑從寬免、妻子免流徙」とあり、注に「楊光先邀蒙恩免、出京回家、行至山東德州地方、病發背死」と見える。

(23) このほかにクブレは中国では寡婦となつたのちに再婚を考える女性がいなことは確かであると言っているけれども、これはあくまでカンディダのような士人層に属する女性の場合のことであつて、わたしが宣教師書簡を読んで知つた限りでは、夫が死ぬと、夫の一族によつて聘財かせぎに他家に再嫁させられる場合が庶民の場合には多かつた。

(24) カンディダは息子が江西駅伝道副使として南昌に駐

在中は江西省の省城南昌に滞在したし、息子が四川布政使司分守上下川東道參政となつて四川に赴任したときには、四川省に行くことを希望した。しかし息子は四川の政情の不安などを理由に漢口に留まるよう勧めたので、結局漢口に残留したという。これらはいずれもカンディダが息子の赴任地に同行して、その地に布教の根拠地を開拓しようと考えたからである。許繼曾は四川にあつては母に代つて教会堂を建てたし、河南按察使として在任中、省都開封に新教会堂を建てるための土地を得てやつた。カンディダは開封には赴かなかつたようである。

(25) 佟国器は康熙の母孝章皇后佟佳民の縁類に當たる。かれは一六五三年福建巡撫、五五年南贛巡撫、五八年浙江巡撫となつたことは明らかであるが、楊光先の迫害の際一旦職を免ぜられ、北京で審問を受けた。しかし友人たちが審問官を買収してくれたお陰で無罪放免となつた。その後かれがどのような官についたかは不明である。クブレは南京の巡撫になつたように書いてはいるけれども、かれが江寧巡撫に任命されたという証拠もないし、徐允希のように、總督（南京にいたるとすれば江南總督か両江總督のはずである）になつたという記録もない。かれがかつてずつと巡撫であつたところから、人びとがその敬称でかれを呼んでいたのをクブレがそのまま採用し

たものだと見る。

修の妻のアガタは、迫害のときに夫が札拝堂から聖像
その他を撤去しようとしたときに、断乎として抵抗した
ほどの熱心な信者であった。かの女は夫を入教させるよ
う力を尽したけれども、妾を離縁できない夫をなかなか
入信させることはできなかった。しかし修は結局入教し
て昇天したという。